

稲作情報

No.1

秋田地域振興局 農林部 農業振興普及課

TEL:018-860-3410

FAX:018-860-3834

育苗期の高温に注意！徹底した温度管理と防除を！

1 気象予報 — 高温に注意 —

4月2日に仙台管区气象台から発表された東北地方の1か月予報によると、向こう1か月(4/4～5/3)の平均気温は高く、降水量と日照時間はほぼ平年並と予報されています。また、期間の前半は気温がかなり高くなる予報のため、育苗ハウスの温度管理には十分注意してください。

2 育苗管理 — 温度管理と水管理 —

中苗の被覆資材(べた張り)除去の目安は、出芽長5mmです。播種後の被覆期間中や緑化期にハウス内温度が高温になると高温障害によるヤケ苗(出芽不良や枯死)が発生する恐れがあるため、温度管理には細心の注意が必要です。また、もみ枯細菌病対策のため、出芽後の再被覆は行わないよう注意が必要です。

播種後10日間の温度管理は、その後の生育や苗質に大きく影響します。ハウス内温度が高温で経過すると、軟弱徒長苗になりやすいので注意しましょう。

苗の葉数にあった適正な温度管理に努めましょう。早朝は寒くても、晴れの日にはハウス内がすぐに高温になります。育苗箱付近に温度計を設置して温度変化に注意しましょう。

通気管理は1葉期頃から実施し、播種後20日間は最高気温25℃以下、最低気温5℃以上を保つようにします。2.5葉期以降は、夜間もハウスを開放して徐々に外気に慣らします。

ただし、極端な低温が予想されるときは、ハウスの裾を閉めて苗を保護してください。

かん水は、「朝または午前中に1回たっぷりと行うこと」が基本です。後半は床土が白く乾いたり、葉が巻き始めたりした場合は十分にかん水します。

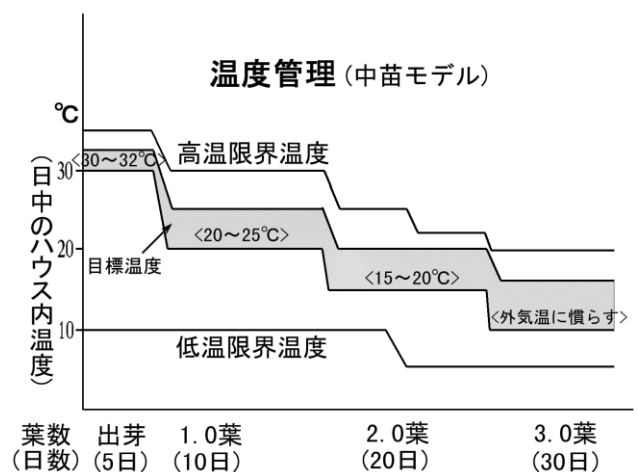


図 育苗期の温度管理(あきたこまち、中苗)

3 苗いもち防除は必ず実施しましょう！

3月18日に発表された「令和7年度農作物病害虫発生予察情報発生予報第7号」によると、いもち病の発生量が「多い」と予報されています。

葉いもち多発の主な原因は、育苗期間中にいもち病に感染・発病した苗に気づかずに植えてしまうことです(持ち込み)。そのため、薬剤防除(次の①または②)と耕種的防除を組み合わせた育苗期のいもち病防除を必ず実施してください。

【薬剤防除】

① ベンレート水和剤

播種時～播種 14 日後までに 500 倍液 500ml/箱、または播種時～播種7日後頃までに 1,000 倍液 1,000ml/箱をかん注します。

② ビームゾル

緑化始期(べた張り除去後速やかに)に 500 倍液 500ml/箱をかん注します。

※使用時期の過ぎた散布や低温時の使用は、葉先が黄化する薬害を生じることがあるため注意が必要です。

【耕種的防除】

① 育苗施設やその周辺に稲わらや籾殻を置かない！

稲わらや籾殻にはいもち病菌が付着している場合があります。育苗ハウス内に野菜の苗等を置いている場合も、保温のための敷きわらや籾殻使用は避けてください。

② 余り苗は直ちに処分！

補植用余り苗は葉いもちの伝染源になりやすいため、不要になったら直ちに泥に埋めて処分してください。

4 もみ枯細菌病に要注意！

【診断方法】

育苗箱の一部に凹部分が見られることで気がつくことが多い病害です。新葉基部と葉鞘部が白色～淡黄色に退色し(右写真)、新葉を引き抜くと簡単に抜ける等の症状が特徴です。



写真 もみ枯細菌病発病苗

【防除対策】

- (1) 種子消毒剤の効果を十分に発揮させるため、種子予措を適切に行いましょう。また、浸種時の低温等により出芽ムラが生じた場合には先に出芽した籾は過剰な被覆期間となり、発病が助長されるため、注意が必要です。
- (2) もみ枯細菌病は高温性の病害で、育苗初期の温度管理が重要です。出芽温度は 32℃を超えないようにし、被覆期間を必要以上に長くしないように注意します。また、出芽後の再被覆は発病を助長するため行わないようにしてください。
- (3) 緑化期以降は 25℃以上にせず、過剰かん水に注意します。
- (4) 前年度に発病した場合は、資材消毒剤のケミクロン G 等で育苗箱の消毒を実施します。
- (5) 発病後の治療薬剤はありません。かん水により被害が拡大するため、発病を確認した場合は、速やかに発病が見られる育苗箱を設置床から外してください。

5 追肥で苗の活力維持

育苗ロング肥料を使用しなかった場合は追肥が必要です。中苗の追肥時期は、2葉期と3葉期頃で、それぞれ箱あたり窒素成分で1gを硫酸等により施用します。

肥料ヤケを防ぐため、追肥後は散水して苗についた肥料を洗い流します。

◇次号は4月 24 日頃の発行予定です。